

日本の回教工作と民族調査

― 戦前・戦中期の内モンゴルを中心として ―

澤 井 充 生

I はじめに

本稿は、戦前・戦中期¹⁾に日本軍部が中心となって展開した回教工作²⁾と実質的には回教工作の一環として実施された民族調査の意味について考察する予備的考察である。本稿では、まず、日本の植民地・占領地における回教工作の方針・施策・内容などを簡単に整理し、その後、回教工作と直接的あるいは間接的な関わりがあった民族調査を事例として取りあげ、最後に回教工作が現地社会に与えた影響について検討する。

最初に、本稿のテーマに関連する先行研究の動向を整理しておきたい。これまでの日本の植民地・占領地に関する研究では、日本の植民地主義と民族学の関わり、日本軍占領下の日本語教育、満洲国や華北地方の村落社会、台湾先住民に対する皇民化政策などについての実証的な研究が進められてきた〔中生 2000；山路 2011〕。また、戦前・戦中期に日本人が中国で実施した現地調査も多く、華北地方の農村慣行、家族・親族、同業組合などに関する実態調査がその資料的価値を高く評価されている〔e.g. 仁井田 1944, 1951；中国農村慣行調査刊行会 1952〕。

日本の回教工作に関する研究としては、1990年代以降、歴史学者を中心として文献史学の手法による詳細な研究が発表されている。例えば、華北と内モンゴルの回教工作については新保〔1999, 2000, 2002, 2003〕、戦前・戦中期の回民工作の全体像については安藤〔2003〕、日本の回教工作と亡命タタール人については坂本〔2008〕、回教工作に関与した佐久間貞次郎については松本〔2009〕、満洲国の回教工作については田島〔2009〕、中国回教総聯合会については山崎〔2011〕が実証的な研究を行っている。いずれの研究も現存する文献資料（例えば、戦前・戦中期の機関誌や機密資料）を活用し、日本の回教工作の全体像が徐々に解明されつつある。

しかしながら、当時の関係者にインタビュー調査を行った新保〔2002〕は別として、先行研究の大部分は文献史学のアプローチによるものであり、結果として、回教工作の政策的側面の分析に重点をおいているせいか、当時を知る現地住民の反応や記憶についてはあまり紹介されることがない。当然のことながら関係者の

多くがすでに他界していることが大きな要因なのかもしれないが、日中両国で「歴史の生き証人」が姿を消す現在、日本の回教工作を実際に体験・経験した当事者の声を早急に記録すべきであろう。また、そうした作業は日本の植民地・占領地支配の実態を多角的に検討するうえで大いに役立つにちがいない。こうした問題意識を出発点として、本稿では、既存の文献資料やフィールドワークで収集できた一次資料によって、中国（主に内モンゴル³⁾）における日本の回教工作の全体像を描き出し、回教工作と直接的あるいは間接的な関係のあった民族調査、そして、現地住民の反応などについて検討する⁴⁾。

ところで、本稿で取り上げる民族調査の対象となった中国ムスリムとは主に回民⁵⁾を指す。中国の回民は中央アジアや西アジアから中国へ移住した外来ムスリムを民族的祖先とし、清真寺（モスク）を中心として独自のローカル・コミュニティを形成してきた。清真寺を中心とするコミュニティは回民の社会生活や歴史的記憶を醸成する重要な空間であり、周囲の漢民（漢人）とは明らかに異なる生活世界である。日本の中国侵略が本格化した後、1932年3月満洲国、1937年10月蒙古連盟自治政府、1939年9月蒙古連合自治政府が成立したが、日本軍部主導の回教工作は中国各地で積極的に展開され、軍事占領下では清真寺の組織形態や権力構造も変容を余儀なくされた。例えば、内モンゴルでは、清真寺は日本軍部（例えば、駐蒙軍、特務機関）やその影響下にあった西北回教聯合会の統制・監視下におかれ、回民の地元有力者（清真寺の宗教指導者や管理責任者）のなかには回教工作に協力する者が現れた。その後、1949年10月に中華人民共和国が成立すると、1957年6月の反右派闘争、1966年8月から1976年10月までの文化大革命など一連の政治運動のなかで、日本の協力者だった回族の人々は熾烈な政治弾圧の対象となり、中国共産党を支持する新興勢力が伝統的なエリートに取って代わって、清真寺の主導権を掌握することとなった。

日本の回教工作が現地の回民社会全体に与えた影響は大きかったが、これまでの先行研究ではそれほど注意が払われていない。本稿では、日本の軍事占領が現地社会にもたらした影響を念頭に置きながら、日本の回教工作、民族調査、現地社会の関わりについて考察する。以下、まず、日本の回教工作の経緯や過程を整理して全体像を把握する。その次に、日本人が蒙疆政権下で実施した民族調査を紹介し、回教工作と民族調査の関わりを指摘し、最後に、回教工作が現地社会に与えた影響、そして現地住民の反応を記述したい。

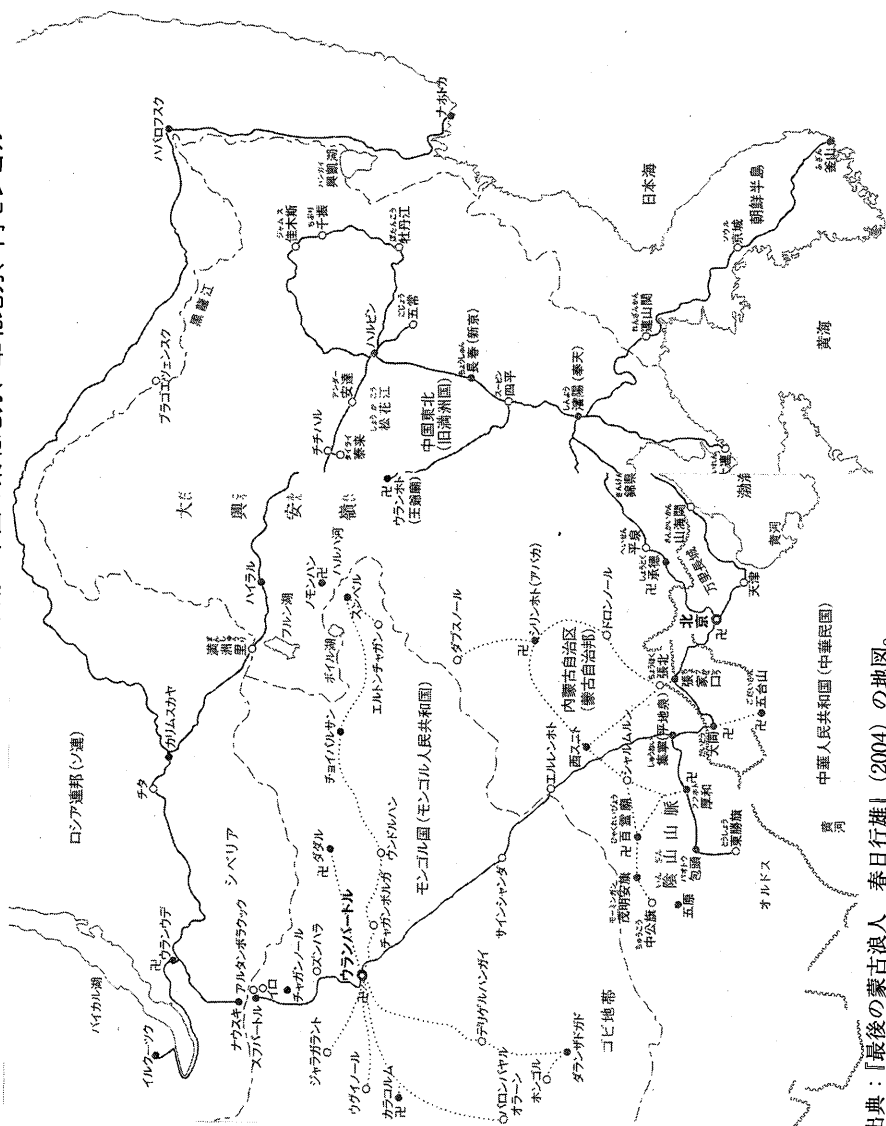
II 日本の回教工作

1 亡命タタール人との遭遇

中国大陸に対する日本の関心は、1894年7月の日清戦争、1895年4月の台湾占領、1904年2月の日露戦争などを契機として高まった。その後、1931年9月の柳条湖事件、1932年3月の満洲国建設、1937年7月の盧溝橋事件などによる戦線の拡大にともない、日本軍部は華北分離政策、内蒙工作、西北工作などを画策し、中国における軍事占領を段階的に進めた。そのなかで日本軍部が積極的に取り組んだ工作のひとつが回教工作であった。その発端は、ロシア（およびその後のソ連）に対する警戒心、中国国内の反日運動、防共、東南アジアへの占領地拡大などの軍事的・政治的な利害関心であり、回教工作は主に日本国内と国外の植民地・占領地でムスリムに対して展開された懐柔・宣撫工作であった。基本的には、日本軍部が中心となって回教工作を展開したが、特務機関、外務省、政治結社などの様々な団体・組織が回教工作に関わったため、回教工作の全体像を解明することは必ずしも容易ではない。本稿では、便宜上、回教工作を日本国内における工作と中国における工作とに分類し、それぞれの特徴を簡単にまとめておく。

それでは、はじめに、日本国内における回教工作を概観しておきたい。日本国内では、ロシア革命から逃れた亡命タタール人などのテュルク系ムスリムを主な対象として、日本の軍人、政治家、活動家たちが回教工作を行っていた。亡命タタール人を取り込む工作はロシア、その後のソ連、共産主義に対する警戒心によるものであった。なぜなら日本は日露戦争でロシアを破ったが、ロシアはその後日本にとっては脅威であり続けたからである。こうした軍事戦略上の利害関係を考慮したうえで、日本軍部は、帝政ロシアに反発していたタタール人アブデュルレシト・イブラヒムに注目し、秘密裏に接触・支援するようになった〔小松2008;坂本2008〕。例えば、1938年5月、日本で東京回教礼拝堂が開堂されたとき、アブデュルレシト・イブラヒムがモスクのイマーム（導師）を担当し、黒龍会の頭山満がモスクの扉を最初に開けた。また、同年9月に同じく東京で大日本回教協会が結成されたが、会長には林銑十郎（陸軍大将、元総理大臣）が着任した。これらの出来事から、当時、日本軍部や活動家たちが日本に暮らすムスリムに接触し、利用しようとしていたことがよくわかる。もちろんムスリム側にも日本軍部などの有力者に意図的に接近した者もいた⁶⁾。いずれにしても、戦前・戦中期、日本のムスリムが回教工作の主要な対象となっていたことは明らかであろう。

地図① 戦前・戦中期の中国の東北地方、華北地方、内モンゴル



清蔵における
春日行雄氏の足跡

—— (鉄道)

..... (トラップ、牛車)

(いづれも黒は1939～1947年、
薄は1956～2003年)

●は重要地名

○は参考地名

出典：『最後の蒙古浪人 春日行雄』(2004) の地図。

2 中国における回教工作

日本国内における亡命タタル人を主な対象とした回教工作と連動しながら、満洲国、華北地方、内モンゴルなどの中国各地においても回教工作が画策・展開されていた。例えば、満洲国成立以前から、関東軍（1919年4月創設）や南満洲鉄道株式会社（1906年11月設立）は中国東北地方の回民や亡命タタル人に対して様々な働きかけを試みていた。例えば、満鉄庶務部は回民調査を実施し、1924年『支那回教徒の研究』を出版している。満洲国では日本人ムスリムの川村狂堂（1877?-?）、三田了一（1892-1983）らがイスラーム関連情報の収集、現地有力者との接触を行っていた。川村狂堂は1910年代に中国（新疆あるいは四川省）でイスラームに改宗したとされるが、満洲国では1934年7月に成立した満洲伊斯蘭協會の総裁となっている。満洲国では地元出身の宗教指導者、例えば張徳純（張子文）が協力者として動員されていた〔張巨齡 2008〕。詳細は未確認であるが、川村狂堂は黒龍会から中国へ派遣されたのではないかと考えられている〔保坂 2008：46〕。一方、三田了一もイスラームに改宗した日本人で、1921年頃に満鉄に入社し、イスラーム関連の情報収集や調査活動に従事していた。後述するが、三田の満鉄入社は同じく日本人ムスリムの山岡光太郎（1880-1959）の斡旋によるという〔小村 1988：61〕。また、前述した亡命タタル人アブデュルレシト・イブラヒムは日本軍部関係者（在トルコ日本大使館勤務の神田正種）の勧誘により、1933年10月、満洲国の奉天を経由して来日している。神田は陸軍中佐であった〔小松 2008：135；松長 2008：204〕。

満洲国のほか、華北地方、内モンゴルなどでも日本軍部は回教工作を積極的に展開した。満洲国の建国後、関東軍は満洲国から長城線を越境し、華北地方で占領地を拡張し始めた。これは華北分離工作であり、1935年5月から河北省、山東省、チャハル省、綏遠省、山西省で画策されたものである。その狙いは華北を中国国民党の支配から切り離すことであった。同じ頃、内モンゴルでモンゴル人の独立運動の気運が高まっており、関東軍はモンゴル人の徳王を支援しながら内蒙工作を展開し、内モンゴルを中華民国から分離させようとしていた。こうした一連の工作を進めるなかで日本軍部関係者が中国各地で遭遇したのがムスリム（主に回民）であり、日本軍部は回民に対する工作を具体的に検討するようになった〔関東軍参謀部 1934〕。例えば、日本軍部は特務機関をつうじて、1938年2月、北京に中国回教総聯合会、同年12月、蒙疆政権下の厚和（現フフホト）に西北回教聯合会を結成させ、前者の顧問を三田了一に、後者の顧問を小村不二男（1912-1998）に担当させている。これらの団体は建前としては回民の団体とされていたが、実質的には日本軍部の統制下・監視下におかれていた。

西北回教聯合会の前身は、張家口の回教会（会長：李郁周）と帰綏城（厚和）

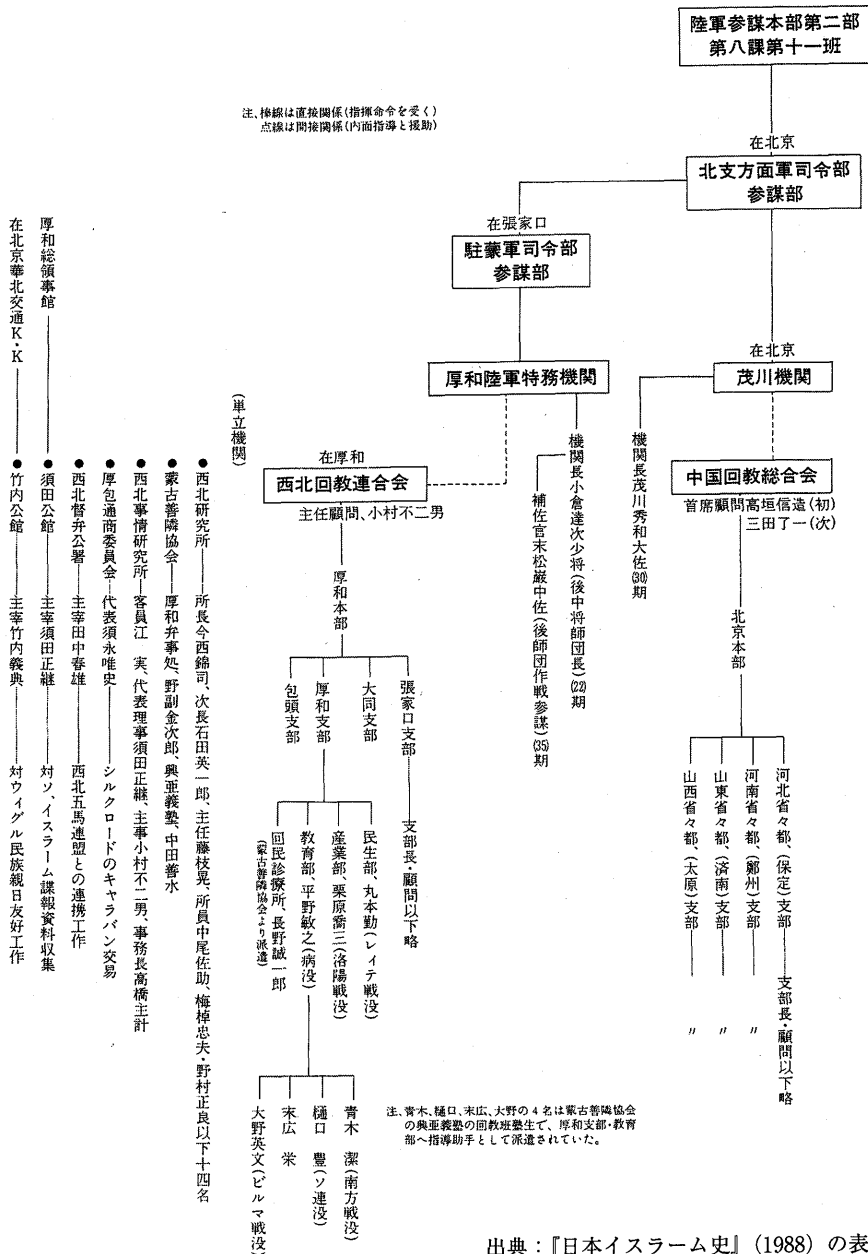
の回教公会⁷⁾(会長：艾馨)で、そこに包頭の回教公会(会長：楊立堂)、大同の晋北回民聯合会(会長不明)が加えられ、1938年12月西北回教聯合会が成立した[呉懋功・王質武 1987: 45-46; 小村 1988: 448-449; 忒莫勒 2007: 70]。西北回教聯合会の本部が厚和、支部が厚和、張家口、大同、包頭に設置された。支部の下には清真寺が分会として位置づけられ(全体で計24分会)、本部と頂点とする一種の階層組織が確立された。当初、同聯合会の会長職は空席で副会長に曹英が就任した。曹英は厚和で徳厚堂を経営する有力者(かつ宗教指導者)であった。新たに成立した西北回教聯合会の顧問には日本人ムスリムの小村が着任し、清真寺の管理・統制、回教青年学校の設立・運営、蒙疆回教徒訪日視察団の組織などの業務に携わった[蒙疆新報 1941年7月16日; 小村 1988: 448-449; 新保 2002: 321-324; 坂本 2008: 56-57]。

また、華北、内モンゴル、西北における回教工作に満洲国の回教工作の経験が活かされたことは看過すべきではないであろう。例えば、満洲国の回教工作に関与していた日本人たち⁸⁾が内モンゴルの包頭へ派遣されて清真寺や学校などで回教工作に従事していたことが報告されている[李士栄 1988: 22]。このほか、前述した満洲国の宗教指導者だった張徳純が内モンゴルにおける回教工作に関与していたことを示す資料が残されている[外務省 1938]。日本軍部は回教工作を満洲国から華北、内モンゴルへと展開していたが、最終的には西北への進出を検討していた。その狙いは、西北の回民軍閥(馬鴻賓、馬鴻逵、馬步芳、馬步青)と協力し、ソ連、中国共産党、中国国民党に対抗することであった⁹⁾。

3 内モンゴルの善隣協会

日本の内蒙工作で言及すべきは善隣協会および興亜義塾の活動である。善隣協会の前身は1933年3月に設立された日蒙協会である。大陸浪人の笹目恒雄、大嶋豊、野副金次郎が創設当初の中心メンバーだった。初代理事は陸軍少将の依田四郎であり、日本軍部の意向にそった形で組織・運営された団体であった。1934年1月、日本軍部(例えば、林銑十郎)や財界の支援を受けて財団法人として善隣協会が設立された。東京に本部が置かれ、1938年4月、蒙疆政権下の張家口に在外本部の蒙疆善隣協会が設置された。善隣協会は内モンゴルにおける教育・文化・医療などの諸活動を行いながら内蒙工作に協力した。回教工作関連では、善隣協会には回民部(部長：土橋一次)が部門として設置されており、回民に特化した政策・工作が実施されていた。回教工作を企画したのは野副金治郎である。例えば、善隣協会は1940年1月、張家口の回民集住地域に回民女塾を設立し、蒙疆政権下の回民女性を対象に日本語を教え、潜在的な対日協力者を養成していた。成績が優秀な塾生のなかには日本の大学へ留学した者もいた。

表① 回教関係機関組織系統表



注、青木、樋口、末広、大野の4名は蒙古善隣協会の興亜義塾の回教班塾生で、厚和支部・教育部へ指導助手として派遣されていた。

出典：『日本イスラーム史』(1988)の表。

この協会のもとに興亜義塾が厚和に開設され、モンゴル人や回民などに対する工作に従事する若者が養成された。モンゴル人やチベット人に対する工作では蒙古班出身の西川一三、木村肥佐生が有名であるが、回教班も優秀な人材を輩出していた。例えば、『善隣協会史』によれば、興亜義塾が輩出した塾生 97 名のうち、回教班の塾生は、第 1 期生では青木潔、樋口豊、今井正三、松本末喜、友常正二、小室泰二、大沢次郎、大野英文、第 3 期生では末広栄、小野村広三、末広伊佐雄、第 4 期生では足立二也、土木田利平、第 5 期生の大村榮一、茂木、富松、佐藤、第 6 期生では鶴川龍一となっており、少なくとも計 18 名が回教工作に何らかの形で関わっていたと考えられる。小村不二男の『日本イスラーム史』の巻末に添付された図によれば、第 1 期生の青木潔、樋口豊、第 3 期生の末広栄は西北回教聯合会の厚和支部に勤務していた [小村 1988]。残念ながら、蒙古班卒業の西川や木村と違い、回教班の卒業生の活動内容については記録資料がほとんど残っていない¹⁰⁾。

Ⅲ 回教工作と日本人ムスリムの動向

1 戦前・戦中期のイスラーム改宗者

次に注目したいのは日本人ムスリムの動向である。戦前・戦中期、中国や日本などでイスラームに改宗した日本人が現れた。日本人ムスリムの多くが回教工作に直接的・間接的に関わっていた。日本の回教工作と日本人ムスリムとは実は切り離せない関係にあり、等閑視すべきではない。資料的な制約があるため、本稿では主要な事例だけを取りあげ、日本人ムスリムが回教工作で果たした役割を確認しておきたい。

まず、戦後日本のムスリム社会の重鎮とも言える小村不二男に注目する。小村は、戦前・戦中期に内モンゴルを中心として回教工作に従事した特務機関員であった。小村は 1988 年に『日本イスラーム史』¹¹⁾ を出版し、自分の体験・経験談を具体的に記述している [小村 1988]。戦後、小村は日本におけるイスラーム団体の設立・運営・宣教などの諸活動に関わる一方、戦前・戦中期の回教工作の関係者を探し出し、インタビュー調査を行っていた。小村の『日本イスラーム史』に埋もれている情報を手がかりとして、日本人ムスリムが回教工作にどのように関わっていたのかを整理してみたい。

表② 戦前・戦中期の日本人ムスリム一覧

氏名	備考
野田正太郎	1868 年青森県生まれ。 オスマン朝のトルコで改宗。アブド・アル＝ハリーム。 最初の日本人ムスリム。1904 年 逝去。
有賀文八郎	1868 年福島県生まれ 1892 年頃？ 改宗。アフマド。 1935 年 日本イスラーム布教本部を東京に設置。 1938 年 イスラーム布教本部から『聖香蘭経』を出版。 ※善隣協会野副金次郎から経済援助あり。
川村狂堂＊	1877 年熊本県（？）生まれ。 1910 年代 中国の新疆省あるいは四川省で改宗。 ※別の説では 1914 年に四川省成都で改宗？ 1929 年 北京の王静斎（宗教指導者）と交流。 1934 年 満洲国で満洲伊斯蘭協会の総裁に就任。 ※福州、杭州、蘇州、泉州、揚州、寧波、上海、鎮江、南京、徐州、 開封、済寧、済南などを視察。
山岡光太郎＊	1880 年広島県生まれ。 東京外国語学校ロシア語科卒業。 改宗時期は不明。ウマル。 1909 年 メッカ巡礼。イブラヒムの紹介による。 1911 年 メッカ巡礼後、中国へ。 1920 年頃？ 三田了一にイスラーム名を与える。 ※三田了一は山岡の斡旋で満鉄に入社。 1959 年 逝去。
田中逸平＊	1882 年東京生まれ。 1901 年 台湾協会学校（現拓殖大）卒業。北京遊学。 1924 年 山東省済南へ。清真大寺で曹鳳麟から受戒。 ムハンマド・ヌール。その後、メッカ巡礼へ。 1924 年 インドで公文直太郎に会い、公文とともに帰国。 1925 年 『白雲遊記』を山東省済南で出版。 1933 年 再度メッカ巡礼へ。 ※頭山満、内田良平、イブラヒム、クルバンガリーと接触。 1934 年 メッカから帰国後、逝去。 ※イブラヒムが葬礼を行う。
福田規矩男＊ （鄭朝宗）	1884 年長崎県生まれ。 改宗時期は不明。イスラーム名も不明。 1908 年 河南省周家口（現周口）に東方学堂を開設。 ※三田了一が東方学堂を訪問したことがある。
佐久間貞次郎＊	1886 年東京生まれ。 1920 年 or 21 年 大連でイスラームに改宗。イリヤース。 ※上海で改宗した説もあり。

	<p>1923 年 光社を発足。 ※クルバンガリー、山岡光太郎、張徳純と接触。</p> <p>1924 年 上海で『回光』発行。</p> <p>1938 年 北京から内モンゴルへ。 ※小村不二男、佐久間の自宅（北京）を訪問。</p> <p>1979 年 逝去。</p>
佐藤 甫	<p>1887 年熊本県生まれ。 改宗時期は不明。イスラーム名も不明。通称は「回山」。</p> <p>1915 年 新疆省イリへ。3 年滞在。</p> <p>1929 年 死去。</p>
公文直太郎	<p>1891 年高知県生まれ。</p> <p>15, 6 歳の頃、朝鮮半島へ。大連で満鉄の職員の世話になる。</p> <p>1914 年 北京経由で甘肅省へ。 中印国境で逮捕・釈放。その後、インドへ入国。 インドで改宗。ムハンマド。</p> <p>1924 年 インドで出会った田中逸平とともに帰国。 ※中国では山東省済南の清真南寺教長曹鳳麟に師事？</p>
三田了一*	<p>1892 年山口県生まれ。</p> <p>1920 年頃 山岡光太郎と師弟関係を結ぶ。 ※ウマルと命名されるが正式には改宗せず？</p> <p>1921 年頃 山岡光太郎の斡旋で満鉄に入社。</p> <p>1938 年 包頭公所の開設。三田、公所の第 2 代所長に着任。</p> <p>1941 年 中国回教総聯合会の顧問に就任。</p> <p>1941 年 北京の牛街礼拜寺で改宗。 ※当時の教長は王瑞蘭。ただし、王教長は 1939 年に逝去。小村の記録では改宗時期が不正確である。</p> <p>※1940 年頃 日本人であるにもかかわらず、寧夏の清真西寺の教長職を打診された逸話がある [小村 1988 : 501]</p>
須田正継*	<p>1893 年山梨県生まれ。</p> <p>改宗時期は不明。イスラーム名も不明。</p> <p>1918 年 東京外大ロシア語卒業。通訳としてシベリア出兵に従軍。</p> <p>1938 年 内モンゴルへ。8 年間滞在。 ※厚和に須田公館を開設。</p>
肥田寛夫*	<p>1898 年生まれ。</p> <p>小林元の薫陶によってイスラームと出会って改宗。 イスラーム名は不明。</p> <p>中学校時代の同級生岩沢光城（イブラヒム）の影響もあり。</p> <p>1939 年頃 神戸に肥田道場を開設。</p> <p>1943 年 支那西北問題懇談会に出席。 その後、満洲国へ。特務機関に勤務。</p> <p>1951 年 逝去。</p>

益子 勇	<p>1899 年 (?) 青森県生まれ。</p> <p>1921 年 陸軍士官学校卒業。</p> <p>青森でクルバンガリーと田中逸平の講演に出席。</p> <p>その後、改宗。イスラーム名は不明。</p> <p>エジプトのアズハル大学に留学。中国ムスリムらと衝突。</p> <p>1933 年頃 その後、イランへ渡航し、現地で逝去。34 歳。</p>
小泉浩太	<p>1903 年東京生まれ。</p> <p>1928 年頃 東京回教学校で改宗。クルバンガリーの影響。</p> <p>1931 年 6 月 大連、北京、内モンゴルへ。</p> <p>※松林亮が頭山満・内田良平の寄付金を小泉に送金。</p> <p>※厚和から曹家の隊商に参加して寧夏へ。</p> <p>1932 年頃 甘粛へ到着。官憲に逮捕され、西安で銃殺刑。</p>
今泉義雄 *	<p>1905 年東京生まれ。</p> <p>1927 年 日本大学卒業。</p> <p>クルバンガリーの影響でイスラームに改宗。サーディク。</p> <p>その後、海軍に従軍し、インドネシアへ派遣される。</p> <p>セレベス回教協会の活動に従事。小村哲夫と宣撫工作に従事。</p> <p>1946 年 帰国。</p>
小林哲夫 *	<p>1911 年兵庫県生まれ。</p> <p>改宗時期は不明。オマル・ファイサル。</p> <p>1936 年 4 月 8 日 アズハル大留学。</p> <p>※最初のアズハル大留学生は益子勇。</p> <p>1939 年末 メッカ巡礼へ。</p> <p>※萱葺信正、後藤信巖と。</p> <p>1943 年頃? インドネシアで特務工作に従事。</p> <p>セレベス回教協会(海軍)へ配属。</p> <p>ボルネオ回教協会、セラム回教協会を組織。</p> <p>マカッサル上空で死亡。29 歳。</p>
小村不二男 *	<p>1912 年京都生まれ。</p> <p>1937 年 11 月 長春から包頭へ行き、有力者に接触。</p> <p>その後、日本に一時帰国して改宗? ムスタファ。</p> <p>1938 年 12 月 西北回教聯合会の設立。顧問に就任。</p> <p>1939 年秋 蒙疆回教徒訪日視察団を日本へ案内。</p> <p>1941 年春 厚和で京城から来た茂野直弘らに会う。</p> <p>1942 年 7 月 西北事情研究所を開設。</p>
中岡良一	<p>1903 年栃木県生まれ。</p> <p>1921 年 原敬暗殺事件で投獄される。</p> <p>1934 年 出獄。その後、満洲国へ。陸軍に勤務。</p> <p>ハルビンでイスラームに改宗? イスラーム名は不明。</p> <p>タートル人女性と恋愛関係に。</p> <p>※ 1937 年に神戸モスクで改宗した説もある。</p>

松林 亮*	<p>1921 年頃? 改宗。イスラーム名は不明。 右翼の活動家。皇国史観の影響あり。</p> <p>1935 年頃 満洲国で張徳純と回教工作に従事。 ※趙銘周ほか 7, 8 名を日本へ派遣。</p> <p>1937 年夏 張徳純、趙銘周、劉錦標、馬良漢に同行して帰国。</p>
小村由太郎*	<p>小村不二男の父。</p> <p>1937 年頃 シベリア経由で京城へ亡命したタタール人と接触。 ※京城に臨時礼拝所あり。 ※代理イマーム：タタール人アブドッラー・ハキーム。 ※京城帝大の茂野直弘も協力。</p>
岡田義雄*	<p>出生年不明。 改宗時期も不明。ムスタファ。</p> <p>1941 年 北京の清真寺で回教を研究する。</p>
鈴木 剛*	<p>出生年不明。 改宗時期も不明。ムハンマド・サーリフ。</p> <p>1934 年 メッカ巡礼。同行者：郡正三、細川将、山本太郎。</p> <p>1936 年 メッカ巡礼。同行者：細川将。</p> <p>1937 年 メッカ巡礼。同行者：満洲国の張世安。</p> <p>1938 年 『日本回教徒のメッカ巡礼』を出版。 ※若林半の経済支援あり。 ※東京イスラム教団のメンバー：郡正三、松林亮と同じく。</p>
若林 半*	<p>出生年不明。 改宗時期、イスラーム名も不明。</p> <p>1938 年 『回教世界と日本』を出版。 ※大日本回教協会のメンバー。 ※鈴木剛のメッカ巡礼を援助。</p>
植原愛算*	<p>出生年不明。 徳島県生まれ。改宗時期、イスラーム名も不明。 ※若林半の弟。 ※共産主義者だったため満洲へ逃亡。</p> <p>1937 年 メッカ巡礼を志すも紅海に投身自殺。 ※同行者：鈴木剛、細川将、榎本桃太郎、郡正三。</p>
郡 正三*	<p>出生年不明。 改宗時期も不明。ムハンマド・アブドゥワリー。</p> <p>1934 年 メッカ巡礼。 同行者：鈴木剛ムハンマド・サーリフ。 細川将ムハンマド・アブド・アル＝ナイム。 山本太郎ムハンマド・アフマド。</p>
大西伸治*	<p>出生年不明。 改宗時期、イスラーム名も不明。メッカ巡礼者。</p> <p>1943 年頃 陸軍第 16 軍参謀部特別班。 ※戦前からインドネシアに関わる。</p>

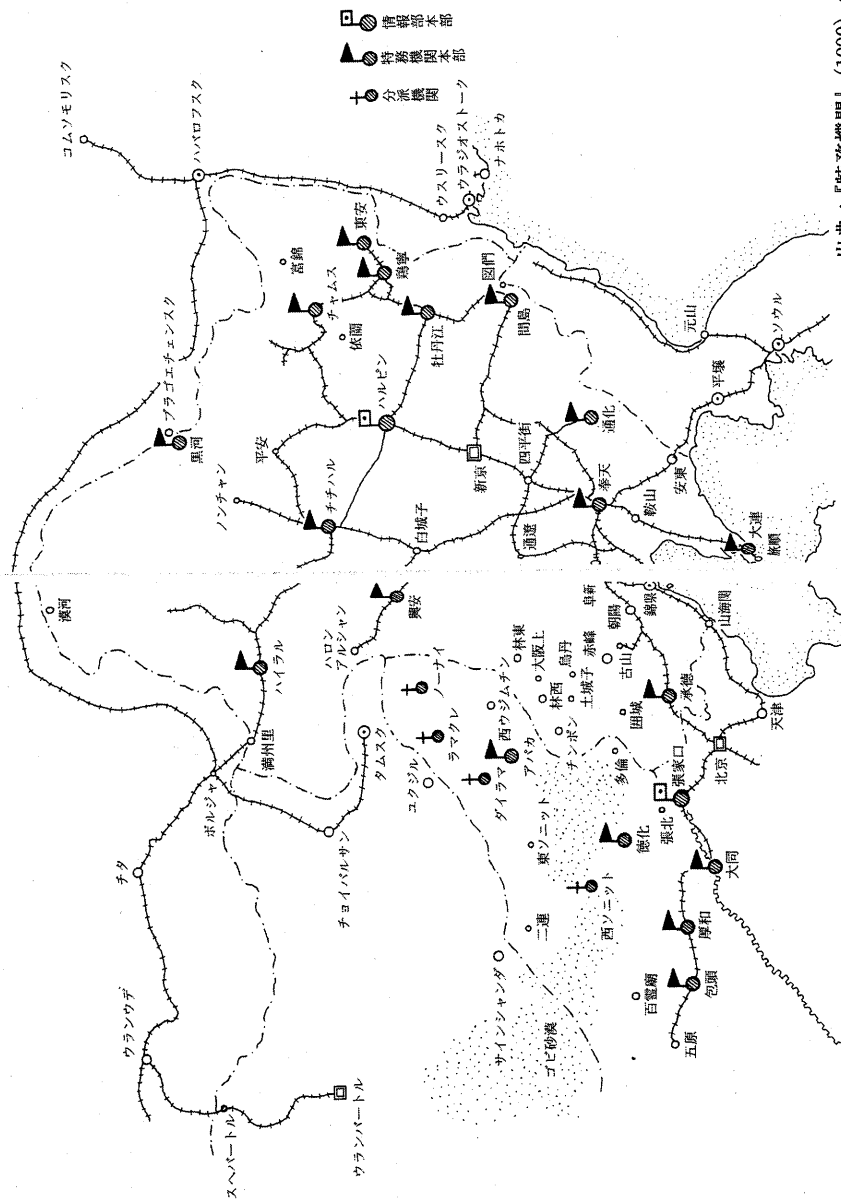
金子 昇*	<p>出生年不明。 改宗時期も不明。アマスラー。 1936年 大東文化学院の回教研究会「支那回教現勢調査団」に参加。 ※中支、北支、内モンゴルを視察。 1943年頃 岩畔機関ベナン特務班で回教工作に従事。</p>
茂野直弘*	<p>出生年不明。 改宗時期、イスラーム名も不明。 1930年代(?) 京城帝大卒。 ※1939年『蒙疆調査報告』(大陸文化研究会)を出版。 ※京城イスラーム協会を組織? ※小村不二男の父と京城で活動か? 1941年春 蒙疆学院へ。</p>
萱葺信正*	<p>出生年不明。 1938年春 上京。 ※若林半の推薦により後藤信巖とアズハル大学へ留学。 1938年秋 東京回教礼拝堂で改宗。イマーム：イブラヒム。 ムハンマド・イブラーヒム。 1939年末 メッカ巡礼へ。同行者：小林哲夫、後藤信巖。 1941年12月 大学で警察に抑留・連行される。 1942年秋 公使館に軟禁。その後、シンガポール経由で一時帰国。 1943年 シンガポールへ渡航。光機関へ配属。 ビルマのアラカン海岸部へ。インド人工作隊を引率。</p>

注記

- ①氏名*：回教工作に関わったと考えられる人物。
 ②年号・時期については『日本イスラーム史』を参照したが、小村自身による
 事実誤認・記憶違いなどもあり、必ずしも正確な情報ではない。

表②は、戦前・戦中期の日本人ムスリムの主要人物を列挙したものである。日本の回教工作に関わっていたと考えられる人物には氏名に*印をつけておいた。彼ら全員が回教工作に関わっていたわけではないが、回教工作に関与していた者が多かったことは一目瞭然であろう。特に、戦後日本のムスリム社会を牽引した三田、小村たちは中国における回教工作に深く関わっていただけに非常に目立った存在だといえる。三田一は山岡光太郎に師事し、イスラームに傾倒し、山岡の斡旋によって満鉄に入社し、その後、満洲国、包頭、北京などでの各地で回教工作に従事した。中国回教総連合会の顧問に就任したことから中国イスラームに精通していたのであろう。北京の牛街礼拝寺で王瑞蘭のもとで正式に改宗したという説がある〔鈴木 2011: 161〕。三田の場合、師匠にあたる山岡がアブデュルレシト・イブラヒムの勧めでメッカ巡礼へ行っているのも、中国ムスリム以外にも亡命タタール人たちとも接触があった可能性がある。

地図② 満洲・蒙古 特務機関の配置



出典：『特務機関』（1990）の地図。

一方、小村の場合、『日本イスラーム史』という大著があるにもかかわらず、中国へ渡航するまでの経歴、イスラームに改宗した時期や契機など自分自身のことについては意外にも書かれていない。中国へ移り住む前に日本人ムスリムたちとどの程度交流があったのかも不明である。おそらく、小村は中国で回民あるいは亡命タタル人と出会ってからイスラームに傾倒したのではないだろうか。実は、父親の小林由太郎もムスリムで、主に朝鮮半島で亡命タタル人と接触していたらしい。その後、父親は不二男のいる厚和に移り住んだが〔傳世魁 2001 : 207〕、彼らが改宗した経緯はよくわからない。次に、小村不二男が主に内モンゴルで行った特務工作を確認しておきたい。

2 小村不二男の特務工作

小村は京都生まれで、天理外国語学校でモンゴル語と漢語を学んだ。その後、どういう経緯なのかは不明だが、満洲国へ渡り、1937年12月に満洲国の新京（現吉林省長春）から蒙疆の包頭へ行き、回民の有力者に接触しながら回教工作の準備を着々と進めた。小村がイスラームに改宗したのは1938年春に日本へ一時帰国した時であったと考えられているが〔新保 2002 : 328〕、そのことを裏付ける資料を筆者は確認できていない。

1938年12月、蒙疆政権下の厚和で西北回教聯合会が設立され、小村が主任顧問に就任した。1939年1月には厚和に回教青年学校を開校し、小村が責任者を務めた。当時、厚和の特務機関長は小倉達次（大佐）で、回教工作に理解のある軍人だったという〔小村 1988 : 119〕。1941年11月、小村は日本軍部に懇請して厚和の清真大寺にミナレットを建設させているが¹²⁾、これも小倉達次の後押しによるものであろう。その後、1942年10月から11月にかけて小村は蒙疆回教徒訪日視察団を日本まで引率している。蒙疆回教徒訪日視察団は善隣協会と日本軍部の働きかけによって実現したのだが、小村も全面的に協力していた。蒙疆回教徒訪日視察団は日本各地を転々とし、日本の軍部や政界の関係者に接見し、東京回教礼拝堂、大日本回教協会などを訪問している〔小村 1988 : 110-111 ; 新保 2002 : 329〕。

時期が前後するが、1941年、小村は厚和の旧城北門外東順城街¹³⁾に回民会館を設立した。小村はこの回民会館に西北地方の交易に従事する隊商を宿泊させることによって、西北地方やイスラームに関する情報収集を行うためである〔傳世魁 2001 : 205-212〕。内モンゴルや西北地方の隊商には回民が多く、西は新疆から東是北京まで交易活動を広範囲に行っていたのだが、小村は回民の隊商の商業網や情報網に目をつけたのであろう¹⁴⁾。回民会館は厚和特務機関が組織した西北貿易通商会（責任者：張廷璽）から資金を提供され、西北回教聯合会の厚和

支部に管轄されていた。回民会館には経理が配置され、地元出身の回民が経理を担当していた。小村は回民会館の顧問を務め、厚和特務機関の宮崎の指示を受けていた。この頃、小村が清真大寺で礼拝する様子をよく目撃されている〔傳世魁 2001 : 206-207〕。

このように、小村の事例から、内モンゴルにおける回教工作については、日本軍部、駐蒙軍、特務機関、善隣協会、西北回教連合会などの諸機関・団体が相互に連携しながら行っていたことがわかる。また、現地にくらす回民の人々（例えば、清真寺の宗教指導者や管理責任者）がどの程度自覚していたのかは未確認であるが、日本の回教工作に直接的あるいは間接的に関わっていたこともおのずとよくわかる。小村が深く関わっていた西北回教連合会にしろ、回民会館にしろ、回教青年学校にしろ、現地の回民が職員として積極的に採用されていた。そのなかには日本人の軍人や警察に反発していた者もいたが、時局の要請から協力せざるをえなかったのであろう。例えば、回民の傳世魁は回民会館の経理を担当していたが、1941年冬に会館内で発生した利用者のトラブルをきっかけに辞職したにもかかわらず、小村の依頼を拒否できず、回教青年学校の会計となっている〔傳世魁 2001 : 209-211〕。

IV 中国における民族調査——回民の実態調査を事例として

ところで、皮肉なことに、日本軍部主導の回教工作に後押しされるかたちで、日本の回教研究は開花することとなった。特筆すべきは、当時、東洋史学を中心とした文献研究だけでなく、現地調査も系統的に実施されていたことである。文化人類学者の中生勝美の言葉を借用すれば、「戦時中の民族学は、戦争遂行のための基礎学問として、あらゆる国で利用」〔中生 2000 : 17〕されたが、当時、民族学だけでなく、東洋史学や社会学などの学問分野も日本の植民地・占領地支配の道具となったことは否定できない。中国回民の場合、満洲国、北京、内モンゴルなどで調査団が組織されて実態調査が行われていた。

補足説明すると、日本や中国には、日本政府や外郭団体などの支援によって回教研究に関連する研究機関がいくつも設立されていた。例えば、日本軍部は内モンゴルに対する軍事作戦を本格的に進めるにあたり、善隣協会を組織した。善隣協会の前身は1933年3月に成立した日蒙協会¹⁵⁾である。日蒙協会は1934年1月に善隣協会と改称し、その後、回教圏攷究所¹⁶⁾を傘下に置き、国策にそったかたちで回教研究を展開した。回教圏攷究所は『回教圏』を定期的に刊行し、イスラーム関連情報を積極的に収集・分析していた。このほかにも、1943年7月には小村不二男が厚和に西北事情研究所を開設し、回民に関する調査・研究を

組織していた [小村 1988 : 451]。それとは別に、1944 年 5 月、蒙古連合自治政府の張家口に西北研究所¹⁷⁾が設置され、今西錦司、石田英一郎、梅棹忠夫ら戦後日本の人類学を牽引した研究者らが民族調査を行っていた [中生 2000 : 213-216]。それでは、ここで、内モンゴルの回民に関する民族調査の具体例を紹介し、調査内容を検討したい。

1 岩村忍調査団による回民調査

1939 年 9 月に日本軍部の支援によって蒙古連合自治政府が樹立した後、蒙疆政権下にくらす諸民族、例えば、モンゴル人、漢民（漢人）、回民などを対象とした実態調査が蒙疆政権下で実施された。回民に関する実態調査としては、東洋学史学者の岩村忍が責任者を務めた回民調査が代表的なものであろう。岩村忍調査団の回民調査は、1944 年に民族研究所と西北研究所の合同調査というかたちで行われた [中生 2000 : 238]。民族研究所は 1944 年 5 月、岩村忍、小野忍、佐口透、川西正巳を蒙古連合自治政府の張家口へ派遣し、蒙疆政権下の回民を調査させた。西北研究所は甲田和衛、野村正良を調査員として派遣した。調査期間はおよそ 4 ヶ月であった。調査員の専門分野は、岩村と佐口の専門が東洋史、小野が中国文学、川西と甲田が社会学、野村が言語学であった [中生 1997 : 61]。

岩村忍調査団の報告書によれば、調査地域は、沙城、宣化、張家口、張北、大同、馬家会、帰綏、薩拉齋、包頭、南海子などの都市や村落であった。岩村忍調査団は詳細な調査項目を事前に作成し、それぞれの地域で文献調査およびインタビュー調査を実施した。佐口にインタビュー調査を行った中生によれば、「現地では、通訳にその調査項目を示し、調査項目に従ってインタビューをおこない、その応答内容をカード化した」という [中生 1997 : 54]。張家口にある清真寺でのインタビュー調査には西北研究所の藤枝晃（東洋史学者）も参加している。調査成果の一部は岩村、佐口、小野が戦後に発表した [岩村 1949, 1950 ; 佐口 1949 ; 小野 1948]、そのなかで最も詳細なものは岩村によって整理・出版された報告書『中国回教社会の構造』¹⁸⁾ [岩村 1949, 1950] である。以下、同書の内容を紹介する。

調査報告書の例 中国回教社会の構造

中国回教社会の構造（上）

序論

- (1) 長城線の意義 (2) 接触地帯 (3) 回教徒集団 (4) 清真寺
- (5) 集団の構造 (6) 2 個の類型 (7) 職業的結合 (8) 血縁的結合
- (9) 清真寺的結合 (10) 集団成立の年代 (11) 集団の分裂

(12) 華北型と内蒙古型

第1章 分布・系統

- (1) 人口の推定 (2) 西北の影響 (3) 内蒙古型と華北型
(4) 宗務者の系統 (5) 回教徒集団 (6) 碑記

第2章 清真寺・宗務者

- (1) 宗務者の種類 (2) アホンの語義 (3) ハリファ (4) イمام
(5) ムアッディン (6) ムフティ (7) 資格としてのアホン
(8) 教長の任務 (9) 教長の待遇 (10) ハリファの修業 (11) 13 部経
(12) 散班アホン (13) 教長とハリファの関係 (14) 本地人と客寓者
(15) 師娘 (16) 師傳 (17) マスジドと清真寺
(18) 宗務者制度における華北型と内蒙古型 (19) 教長裁判
(20) 回教徒集団の相互扶助的機能 (21) 本寺と分寺
(22) 各清真寺間の関係 (23) 阿文小学校 (24) 宗務者と教胞の比率
(25) 清真寺の建築 (26) 清真寺の経営と財政
(27) 経営における華北型と内蒙古型

中国回教社会の構造 (下)

第3章 教胞

- (1) 呼称 (2) 回教徒集団の構成 (3) 集団の限界 (4) 分裂現象の過程
(5) 集団成立の過程 (6) segregation への傾向 (7) 改宗の実例
(8) 馬家会村 (9) 入教の儀礼 (10) 華北型の一特徴 (11) 通婚範囲
(12) 蒙古人との通婚 (13) 婚姻慣習 (14) 財産関係 (15) 割礼
(16) 葬礼 (17) 宗族制の欠如と擬似種族意識 (18) 職業的偏向性
(19) 禁忌 (20) 巡礼 (21) 服飾 (22) 言語 (23) ザカート
(24) サダカ (25) 費突銭 (26) 月費・献金 (27) 礼拝 (28) 斎戒
(29) 年中行事 (30) 回漢の関係

第4章 郷老

- (1) 郷老の機能 (2) 郷老選挙と任期 (3) 郷老の本質
(4) シャイフとの類似性 (5) 指導層としての郷老団 (6) 郷老支配

第5章 教派

- (1) 三個の教派 (2) 教派間の紛争 (3) 教派間の相違
(4) 新新教の系譜 (5) ワッハビ派との関係？

岩村忍調査団の実態調査はどのようなものであったのだろうか。まず、調査団の責任者に相当する岩村が東洋史学を専攻していたからか、歴史資料（史料）の

収集が調査地で丹念に行われていた。特に清真寺の碑文の記録・考証は緻密であった。また、社会学者の調査員がいたこともあり、文献調査のほか、インタビュー調査も積極的に実施され、当時の清真寺関係者の貴重な証言が記録されている。当然のことながら人類学者のインタビュー調査とは性質は異なるが、現地社会の歴史を再構成するための手法としてインタビュー調査が導入されたことは興味深い。こうした文献調査とインタビュー調査を組み合わせた研究方法は蒙疆政権下の回民社会の全体像を具体的に把握することに役だったにちがいない。全体を読み終わって感じたことだが、東洋史学者が中心となった実態調査だったにもかかわらず、回民の集団分類や集団編成の分析が試みられていたことにいささか驚いた。このような調査の方向性や手法が調査団の学問的な問題意識によるものなのか、あるいは西北研究所や民族研究所の政治的な意向にそったものなのかは現時点では確認できない。岩村忍調査団が国策に協力していたという批判が戦後にあったようだが、発表された報告書には中国回民を知るための方法¹⁹⁾が具体的に提示されている。

2 蒙疆善隣調査部の回民調査

岩村忍調査団の回民調査は民族研究所と西北研究所に組織され、当時、第一線で活躍する東洋史学者や民族学者が関わっていたこともあり、学術的な水準が非常に高かった。こうした「純粋学問」的な調査とは少し異なるのだが、善隣協会も回民の実態調査を行っていた。蒙疆善隣協会に調査部があり、蒙疆政権下で回民調査を実施し、1942年に『蒙疆回教徒実態調査資料』（第1輯）を出版している。善隣協会は日本軍部の強力な支援のもとで組織された団体であり、善隣協会が蒙疆政権下で展開した各種事業は内蒙工作进行を推進するためのものであった。こうした経緯をふまえれば、蒙疆善隣協会調査部の実態調査は当初から政治的思惑に絡みとられていたといえる。しかし、だからこそ、実態調査の内容や結果には「純粋学問」的な調査とは異なる特徴がみられ、またそれが示唆的でもある。以下、蒙疆善隣協会の回民調査を紹介する。

蒙疆善隣協会調査部は、1942年5月から11月にかけて、蒙疆政権下の包頭、薩拉斎、厚和の3箇所で行民を対象とした実態調査を行った。調査部員は蓮井一雄、麻耀文、閃日中の計3名であった。蓮井の素性は不明であるが、後者2名は氏名から判断するかぎり、回民であろう。この実態調査では、回民の家族、職業、保健衛生、住居、被服、食物、社会組織、宗教・教育、娯楽文化、慣習などについてアンケート調査やインタビュー調査が実施された。世帯構成、婚姻関係、服喪慣行などに関する調査項目も準備されていたことから、社会学や民族学の問題関心にも注意が払われていたことがわかる。以下、同報告書の内容をみてみよう。

調査報告書の例 蒙疆回教徒実態調査資料（第1輯）

第1輯 家族

- (1) 籍貫と職業調査地 (2) 籍貫の調査地
- (3) 墓碑に記載された籍貫調査地（省別） (4) 直系親族の系譜
- (5) 家族構成 (6) 年齢調査表 (7) 家族年齢調査
- (8) 家族人口数と世帯数の調査 (9) 姓氏調査地 (10) 転入出調査地
- (11) 家族の外出と来訪者の調査地 (12) 来訪者の調査地
- (13) 家族の外出状況調査 (14) 婚姻状況（男性） (15) 婚姻状況（女子）
- (16) 配偶者選択の条件 (17) 婚礼の際に招待した宗教指導者の人数
- (18) 結婚年齢 (19) 過去6年内の既婚者の年齢 (20) 配偶者間の年齢差
- (21) 婚礼参加者 (22) 結婚前の女性の居住地 (23) 早婚者調査
- (24) 児童数、出生人数 (25) 早婚者の子どもの状況
- (26) 未婚者の年齢調査地 (27) 出生調査 (28) 再婚・離婚者調査
- (29) 服喪 (30) 葬礼（故人） (31) 葬礼（参列者） (32) 分家調査
- (33) 養子調査 (34) 鰥夫・寡婦 (35) 妾 (36) 独身者
- (37) 身体障がい者 (38) 使用人

『蒙疆回教徒実態調査資料』は第1輯であり、それに続く第2輯（職業）、第3輯（保険衛生）、第4輯（居住）、第5輯（被服）、第6輯（食物）、第7輯（社会組織）、第8輯（宗教、教育）、第9輯（文化娯楽）、第10輯（風俗習慣）も出版を予定されていたのだろうが、おそらく未刊のようである。少なくとも日本国内には第1輯しか残されていない。本稿では第1輯に限定して調査内容を確認してみたい。

この報告書の構成や調査資料をみるかぎり、回民の年齢、性別、家族、親族、婚姻、葬儀などの調査・分析に重点が置かれていたことがわかる。調査員蓮井一雄の専門分野を確認できていないが、社会学（家族社会学あるいは法社会学？）の問題関心にそったかたちで調査項目が設定されたと考えられる。特に、岩村忍調査団の実態調査と異なる点は、蒙疆善隣協会の実態調査では現地社会の歴史的背景や社会史に関する調査が一切行われていないことである。つまり、調査対象に対する通時的な視点が欠如しているのである。この報告書には調査資料がそのまま掲載・記載されているだけなので、実態調査の意図や目的については詳細を確認することができないが、現地住民の人口規模、家族・親族の構成、近隣関係などの解明に重点をおいていたようであった。蒙疆善隣協会の場合でも、実態調査がどのような方針や意向によるものかは不明だが、おそらく蒙疆政権下にくらす少数民族、特に中国西北と関係のある回民の現状を具体的に把

握しなかったのであろう²⁰⁾。

3 回教工作と民族調査の関わり

岩村忍調査団にしろ、善隣協会調査部にしろ、現地調査のレベルは決して低いものではない。人類学者のフィールドワークとは異なるが、調査資料それ自体の価値は高い。どちらかといえば、岩村忍調査団の実態調査は「純粋学問」の色彩が濃い、調査員たちは民族調査を本格的に実施する以前から西北事情研究所で小村不二男と接触しており、小村が所属していた特務機関や西北回教联合会などの関係者と情報交換をしていた可能性がある。例えば、小村が厚和に開設した西北事情研究所では毎月1回、定例会が開催されていたのだが、佐口透や石田英一郎が出席していた[小村 1988: 116]。佐口は岩村忍調査団の主要メンバーで、民族調査の準備作業に深く関わっていた。

民族研究所と西北研究所がともに当時の国策にそった形で組織・設立されたこと、岩村忍調査団員が特務機関の関係者と接触していたことなどから、たとえ研究者だけで構成された調査団であったとしても、内蒙工作や西北工作に情報を提供していた可能性がないとはいえない。実際、厚和の特務機関員だった小村は蒙疆に入ってくる日本人の動向をかなりの程度まで把握できており、また、自分の手腕で研究所を開設するほどの権限があったわけだから、当時、「純粋学問」に見える実態調査も「政治」とは無縁であったとは考えにくい。中生の言葉を借りると、「当時の歴史的背景を考えれば、たとえ研究者であっても純粋に学問的な調査ではなかった」[中生 2000: 239]のである。

その一方、岩村忍調査団が実態調査で収集した一次資料は、回民社会の全体を網羅したものではないにしても、一次資料としての価値が非常に高いことも事実であろう。このことは否定すべきではない。世界的にみても、回民(回族)の民族誌的資料が少ない現状に鑑みると、岩村忍調査団の報告書は現在も注目に値するし、また、研究者にとって実用度の高い調査報告書であるといえる。個人的な体験談としては、中国回族学会の研究者たちに岩村忍調査団の報告書をみせると、「ぜひ参考にしたい」と言って必ず複写を依頼される。中国の学界には戦前・戦中期の民族調査の内容を知らず、調査報告書を目見て驚きを隠せない人も少なくない。

中国研究に関するかぎり(台湾研究は除く)、戦後日本では、それ以前の民族調査の資料は十分には参照・活用されていないのではないだろうか。それよりもむしろ、最近、現在研究に特化しつつある若手研究者の場合、戦前・戦中期の研究成果を顧みない人たちが増えているのかもしれない。かつての民族調査が日本の国策の強い影響下にあったとはいえ、調査資料それ自体の価値は認めてもよい

はずだし、認めるべきである。例えば、日本の植民地・占領地となった地域を研究する場合、戦前・戦中期の民族調査を参照しないことには、現地社会の変容を近現代史の文脈のなかで理解することは不可能であろう。

V 現地住民の反応

それでは、最後に、日本の回教工作に対する現地住民の反応、回教工作が現地社会に与えた影響について考えてみたい。本稿の前半部分では、日本の回教工作の歴史的展開を記述したが、日本の回教工作が実際にどの程度有効であったのかということについては検討できていない。近年、日本の回教工作を実際に体験・経験した住民は年々減少しており、「生の声」の記録・収集は困難を極める。そこで、本稿では、既発表の口述資料や筆者が調査地で聞いた話を紹介しながら現地住民の反応を具体的に描き出してみたい。

1 特務機関員とのせめぎあい

ここで、西北回教聯合会の重要な役職にあった回民の事例を取りあげる。前述したように、西北回教聯合会は厚和で組織され、厚和に暮らす回民の有力者たちが日本軍部の駐蒙軍や特務機関によって協力者として動員されていた。最も代表的な事例として知られているのは、清真大寺の宗教指導者や管理責任者を輩出した曹家の人々である。曹家は、清朝末期からラクダの隊商を組織し、交易・運送業に積極的に行う回民の一大家族であった。商号は徳厚堂。日本軍部からみた場合、曹家の人々は広範囲な商業網と情報網を持ち、なおかつ、厚和の回民社会のなかで大きな発言権と影響力をもつ有力者であり、回教工作に取り込むべき格好のターゲットであった。実際、小村もよく回想するように〔小村 1988：230〕、日本軍部と曹家とのあいだには一定の協力関係が築かれていた。当然のことながら、それぞれが相互に利用しあっていた可能性が高いのだが、西北回教聯合会にしても、蒙疆回教徒訪日視察団にしても、曹家の有力者たちが日本の回教工作に関与していたことは間違いない〔代 2001：241〕。

ただし、1980年代以降に出版された曹家の口述資料には、蒙疆回教徒訪日視察団をめぐる日本人の特務機関員とのかけひきが具体的に描写されており、非常に興味深い。それは、回民の有力者と日本軍部の力関係を知るうえでは有益な情報を提供してくれるはずである。以下、口述資料の原文を引用し、事例を紹介したい。なお、この事例に登場する日本人特務機関員とは、厚和特務機関回教支部顧問の太田である。

事例 日本人指定曹家人去日本觀光

日本人为了推行了“大东亚共荣圈”，强迫回族上层人士赴日本参观，即组织所谓的“观光团”。他们曾在厚和市组织三批人，约15人。其中，第一批观光者有曹世华，第二批有曹英。现简述一下第一次组织观光团的情况：

第一批赴日“观光团”事宜，酝酿于1938年。日本特务头子太田是具体操办者。他指定清真大寺教长杨觐元和“德厚堂”掌柜子曹万等5人代表厚和市的伊斯兰教界和民族人士到日本观光。太田的指令一下达，清真大寺的乡老们忙作一团。当时，杨觐元阿訇已80多岁，经不住长途的劳累，乡老们趁日本不备，派人连夜将杨阿訇的“海立凡”马翰林代替他。

再说曹万，是商场上的好手，“德厚堂”的商事是由他出谋划策的，可对政治不感兴趣。他对周围的人常说：“交官贫，结客富，为下和尚一道树。”日本人一入厚和，硬给他戴了一项“副会长”的帽子，令他叫苦不迭。这次观光，又让他凑一份子，这可把他给谁住了。曹万成天愁眉苦脸，闷闷不乐。一日，太田追到清真寺问他如何？曹万讲：“我的大儿、二儿都出外作买卖去了，我上有老，下有小，实在走不开。”他还想继续解释，太田大发雷霆，用手指着曹万说：“你大大的不识抬举，我们日本大帝国是让你们去观光，看看我们国家的兴盛、富强，你为什么不去？”曹万看太田怒目而视，急忙转身回家。俗话说“秀才遇见兵、有理说不清。”看来，“商人”遇见兵，也是有理说不清。曹万垂头丧气，回家和老伴说：“今天鬼子又去问我观光的事，还没等我说完，他就骂骂咧咧，看来我这次是逃脱不了了。”老板见丈夫满脸愁容，就出主意：“你和他再说说，能不能派个孩子替你。”曹万一听也是，等下次太田又去问他，曹万讲：“顾问先生，我实在走不开，让我的儿子去吧！”太田二话没说，只崩出两个字：“名字？”曹万赶紧说：“曹世荣。”他为什么如此痛快？后来才知道，张家口已几次催促他，速让厚和的人出发。听完太田便走了，曹万高兴地回了家。一进家，见老伴及三子曹世荣、四子曹世华都在，对他们说：“我和“伊不利斯”（恶鬼）说妥了，让福元替我去。”他刚讲毕，曹世荣（小名叫福元）连声说：“我不去，我去做买卖呀！”曹万心上才放下的石头又悬了起来，怎么办呢？曹万又作难了。曹世华看见父亲愁眉不展，就主动说：“大（爸），我去吧！”曹万听四儿子主动要求去，就点头应诺。[代 2001：242-243]

この事例では、厚和特務機関に勤務する太田が蒙疆回教徒訪日視察団に参加するよう、徳厚堂の曹万（曹英の兄）に再三打診したのだが、曹万は西北回教聯合会に関わった頃から日本軍部との接触には辟易し、どのように回答したらよいのかわからず、困り果てていた。ある日、太田は清真寺にまでわざわざやってきて、特務機関員の立場を利用して、なかば強引に話を進めようとした。結果的には、曹万は家族会議を開き、息子を自分の代わりに日本へ行かせることになって問題は解決したのだが、そこにいたるまでの過程に注目したい。

曹万のような有力者の場合、普段から交渉術や参謀術を磨いていたにちがいない。日本人の特務機関員とのやりとりでも簡単に言いなりになることはなかった。曹万は太田の要求を聞き入れながらも、息子を代役として日本へ行かせることによって、苦境からなんとか抜け出せている。また、家族との会話のなかで曹万は太田を「鬼子」（漢語で日本人に対する蔑称）や「イブリース」（アラビア語で「悪魔」の意味）と呼んでいたことに注目したい。当時の中国国内情勢を想像すると、日本人の特務機関員の目の前では悪態をつくことなどまず不可能であろうが、曹万は自分の家族の前ではあえて侮蔑的な表現を用いて太田について話していた。こうした言動は、日本人の特務機関員に対する曹万なりの面従腹背の態度を絶妙に言い表しているといえる。

もっとも推測の域を出ないが、この事例にみられるように、日本軍に占領された側にわずかながらも交渉の余地が残されていたことは蒙疆政権下における回教工作の特殊性と関係があるかもしれない。例えば、1941年6月に蒙疆連合自治政府には回教委員会²¹⁾が設置されたが〔柴田 2007: 58〕、特定の少数民族のための委員会を設置することは珍しいことであった。ちょうど同じ頃、日本軍占領下にあった北京には類似の機関がなかっただけに、回教委員会の設立は内モンゴルにおける回教工作の特殊性といっても不自然ではない²²⁾。おそらくそれは、日本軍部が満洲国や北京における回教工作の失敗や挫折をふまえ、内モンゴルでは回教工作をより巧妙に展開しようと考えていたからであろう。実際、蒙疆政権下では、厚和や包頭などの特務機関によって回教や回民という名のついた団体がいくつも設立されていた。

2 現地社会に対する影響

日本の軍事占領は内モンゴルでは1937年から1945年まで継続した。この8年という年数が現地社会に与えた影響は見過ごすべきではない。内モンゴルで回教工作に関わった回民の人々は1945年以後、どのような境遇におかれたのだろうか。また、日本人との遭遇は現地社会にどのような変化をもたらしたのであろうか。日本の軍事占領という大きな衝撃は1949年以降の中国共産党支配期にどの

ような余波をもたらしたのであろうか。以下、簡単にまとめておきたい。

日本軍部と密接な関係にあった回民の人々は、中国共産党の支配が始まった後、人民裁判や政治闘争のなかで酷い扱いを受けた。例えば、西北回教聯合会や回民會館に勤務していた艾馨（艾福堂）は1951年8月、反革命罪を理由に処刑されている〔政治協商會議呼和浩特市回民區委員會・『呼和浩特回族史』編集委員會（編）1994：351〕。それに対して、徳厚堂の曹英は処刑を免れている。おそらく曹家には莫大な財力や宗教的な威信があったため、当初、中国共産党は曹家を擁護あるいは利用しようとしたからであろうか。しかし、文化大革命が始まると、曹英はやはり攻撃の対象となった〔政治協商會議呼和浩特市回民區委員會・『呼和浩特回族史』編集委員會（編）1994：227〕。曹英と面識のある人々の話によれば、曹英は晩年、日本軍占領時代についてはほとんど語ろうとはしなかったという。実は、1960年代、フフホト市の郷土史家が曹英にインタビュー調査を行ったことがあるが、ラクダの隊商に関する口述資料があるだけで、それ以外のことについては一切記録されていない。

次に、清真寺やコミュニティはどうなったのだろうか。戦前・戦中期、清真大寺が厚和を代表する清真寺であった。それゆえ、大寺の宗教指導者や管理責任者（曹家の人々）には大きな発言権や影響力があった。このことは、フフホトで大寺を中心として回民のコミュニティが歴史的に形成されたことと関係している。結果、大寺が「大坊」、ほかの清真寺が「小坊」と呼ばれるようになり、イスラームの年中行事や葬礼を執り行う場合、小寺の人々が大寺に集合し、行事を合同で執り行う慣習ができあがった。日本軍が立ち去るまでは、大寺を管理していた曹家が厚和の回民を代表する最大の有力者であった（それゆえ日本軍部が接触し利用したわけである）。

ところが、中国共産党が内モンゴルを「解放」すると、土地改革や反右派闘争などによって、大寺の宗教指導者や管理責任者も政治運動の荒波にのみ込まれ、「政治の表舞台」から消え去った。特に、文化大革命期には、清真寺の大多数が閉鎖あるいは破壊されたため、伝統的な指導層は清真寺の主導権を完全に失ってしまうこととなった。例えば、大寺の場合、改革開放政策が本格的に導入された1980年代以降、曹家の家族・親族が大寺の管理運営権を掌握しているわけではない。そのかわり、新興勢力（例えば、党・行政とコネクションのある人々）が管理委員会を組織している。また、大寺とは無関係の清真寺が新たに建設され、それが求心力をもち始め、フフホトにおける清真寺間の力関係が戦前・戦中期とは大きく変わってしまった。このように、大寺を独占できていた曹家の人々は1949年以降はフフホト市や清真寺のなかで存在感を失ったわけだが、その背景には日本の軍事占領期以来の政治変動が関係していることははっきりしている。

VI おわりに

筆者は2004年頃からはほぼ毎年、内モンゴル自治区で清真寺や回族のコミュニティに関するフィールドワークを断続的に行ってきた。現地では回族の人々に会うたびに必ず質問されるのが小村不二男の近況である。小村が1998年に逝去²³⁾したことを知らせると、回族の人々は全員が一様に驚き、残念そうな表情をみせる。「小村は日本の特務機関の手先だったのではないか?」と筆者が問うと、「小村は清真大寺のミナレットを建設してくれた」と懐かしそうに答える老人たちが現在も少なくない。清真大寺はフフホト市で有名な観光地となっているが、ミナレットは小村が日本軍部に懇請して建設されたものである〔小村 1988: 119〕。清真大寺のミナレットは礼拝の呼びかけ、月の満ち欠けの観測のときに使用される。日本の軍事占領が現地社会にもたらした惨事を肯定するつもりはないが、日本の回教工作の一環として建設されたミナレットが現地に暮らす回族の信仰生活を支えてきたことにも最後に書き加えておきたい。

小村にまつわる昔話を耳にするたびに気になるのが、回族の人々が日本人に対して抱く感情である。全体としては、日本軍部に対する嫌悪感はひろく語りつがれているが、それとは別に、同じ町に暮らした日本人(民間人)との関係がおおむね肯定的に語られることが多い。かつての厚和で日本人と付き合いのあった人々は、日本人という単語を耳にすると、嫌悪感と親近感という相容れない感情を同時に抱くのであろう。悪名高き日本の特務機関のメンバーであり、かつムスリムであった小村を懐かしむ人々も実は例外ではないはずである。

冒頭で述べたように、日本の植民地・占領地に関する研究では、中国東北地方を中心とした研究が多く、漢族以外の少数民族は研究対象から捨象される傾向にある。例えば、満洲国や蒙疆政権下には漢族以外にも多数の少数民族が生活しており、日本人が残した現地資料が豊富にある。しかしながら、不思議なことに、かつての調査資料を積極的に活用した研究はさほど見受けられない。日本の軍事占領下、少数民族がおかれた立場を明らかにすれば、日本の植民地・占領地支配の全貌を従来とは異なる角度から眺めることができるはずである。本稿は、日本の回教工作およびその一環として実施された民族調査が現地住民に与えた影響を検討するための予備的考察にすぎず、歴史資料や口述資料の収集・整理・分析を現在も継続中である。史料批判や時代考証などの方法に問題点があるだろうが、それについては今後の課題として別稿で検討したい。

注

- 1) 本稿でいう「戦前」とは太平洋戦争勃発前を意味する。
- 2) 日本が東アジアや東南アジアなどの地域に暮らすムスリムに対して展開した懐柔策や宣撫工作には、「回教工作」「イスラーム政策」「対ムスリム工作」など様々な名称が使われる。当時の懐柔策や宣撫工作を一貫した政策あるいは工作として捉えることができるのかについては検討の余地はあるが、本稿では「回教工作」と表記する。
- 3) 本稿においては「内モンゴル」という地名のほか、「蒙疆」という地名も使用する。この「蒙疆」という地名は1939年9月に成立した蒙古連合自治政府の政権下にある地域（現在の内モンゴル自治区、山西省、河北省の一部）を指す。
- 4) 例外として、文化人類学者の中生勝美が「植民地人類学」として行った一連の仕事は注目に値する。中生はこれまでに民族研究所や西北研究所の成立背景や民族調査の意味を解明し、植民地支配と日本人類学の関わりに対して検討を加えている[中生 1997, 2000]。
- 5) 1949年10月に中華人民共和国が成立した後、中国共産党は、それまでは「回民」と呼ばれていた漢語を母語とするムスリムの集団を「回族」という1つの少数民族として正式に認定した。中華民国期と中華人民共和国期とは「回民」や「回族」という概念の指す内容は若干異なるが、本稿では1949年以前の場合は「回民」、1949年以後の場合は「回族」という名称を使用する。ただし、特に厳密に区別する必要がある場合にかぎっては回民（回族）あるいは回族（回民）と表記する。
- 6) その代表的な人物として、亡命バシキール人ムハンマド・ガブデュルハイ・クルバンガリー（1889-1972）の名を挙げることができる。クルバンガリーはロシア革命後、満洲に亡命し、ハルビン特務機関と接触して来日した。1924年以降、日本国内で東京回教教団や回教学校を設立し、亡命タタール人などの組織作りを力をついだ。しかし、クルバンガリーは日本国内で亡命タタール人アヤズ・イスハキと衝突し、事態が深刻化したため、東京回教礼拝堂開設の直前に国外へ追放された[松長 2008: 198-201]。
- 7) 綏遠回教公会の場合、総会が清真大寺、分会がほかの清真寺に設置された。総会会長には楊顕元、副会長には曹万が就任した。楊顕元は大寺の教長で、曹万は徳厚堂を経営する有力者であった。本部内の弁公処処長を艾馨（艾福堂）が担当した[代 2001: 213]。
- 8) 例えば、内モンゴルの包頭で回民の子どもたちを相手に日本語を教えていた菅沼正芳は1932年7月に発足した満洲国協和会の元会員であった。包頭の文史資料で菅沼正芳の名前はよく登場し、日本語名のほかに馬仁徳という漢語の名前（回民風の名前）も使用していた。菅沼は包頭特務機関の甘寧回民支部の顧問だった[李士榮 1988: 24]。
- 9) 青海省の馬歩芳の利用については在上海領事館日高信六郎[1938]の記録に詳しい。
- 10) 興亜義塾第3期生で蒙古班に学んだ築山力（1921-1981）は、戦後、小村不二男とともにイスラームの宣教活動に関わっていた。おそらく、戦後にイスラームに改宗したらしく（イスラーム名はサリム）、小村不二男とともにイスラーム友愛連盟を組織・運営し、日本の若者をイスラーム諸国へ派遣していた。小村の記録によれば、築山は昭和40年代以降に転身したという[小村 1988: 110]。
- 11) 『日本イスラーム史』には当時の特務工作について小村が具体的に記述した箇所が散見される。同書の資料提示や歴史記述の方法は学術書とは異なり、それゆえ研究者にはあまり参照されないようだが、回教工作の関係者の口述資料としては資料的価値が非常に高い。
- 12) 1941年11月21日に落成式典が開催された。出席者は、厚和特務機関、西北回教聯合会、厚和伊斯蘭婦女協会、回教青年学校の関係者であった。厚和特務機関長（小倉達次）、西北回教聯合会厚和支部長兼総務部長（艾馨）、同会厚和本部副部長（？）がそれぞれ祝辞を述べた。除幕式にあたって大寺の宗務者（教長職にはない者）がアザーン、すなわち礼拝の呼びかけを行い、教長（劉富瑞？）がクルアーンを朗読した。式典の終盤には大寺の元教長（馬謙譜）が謝辞を述べている。式典は午後4時に開始して午後6時には終了した[蒙疆新報 1941年11月24日]。なお、蒙疆新報に記載されていない情報は他の文献資料で補足した。

- 13) 回民会館のあった旧城北門外東順城街は現在の中山西路の回民医院の付近である。
- 14) 後述するように、小村は1943年7月、西北事情研究所を開設し、蒙疆政権下の回民調査を実施させていた。例えば、西北事情研究所は「厚和市回民駱駝業者一覧表」という回民の隊商に関する詳細な一次資料を内部資料として作成・報告している（アジア歴史資料センター Ref. B08061964800、外国旅商関係雑件 B-E-2-11-0-4：外務省外交史料館）。
- 15) 初代理事長は陸軍少将が担当した。
- 16) 大久保幸次が設立した研究機関。1940年5月に回教圏研究所と改称した。
- 17) 1942年11月、大東亜省の大使館が張家口に設立され、その付設機関として西北研究所が開設された。機関長は土橋一次（蒙古善隣協会理事長、予備役中将）、所長は京都帝国大学理学部講師の今西錦司が務め、研究員には石田英一郎、藤枝晃、磯野誠一、酒井行雄、甲田和衛、菊池杜夫、加藤泰安、野村正良、森下正明、中尾佐助、梅棹忠夫がいた〔中生 2000：218〕。それに先立ち、1943年1月に東京に民族研究所が設立されたが、同研究所は文部省直轄の研究機関であった。民族研究所の成立および活動については中生〔1997〕に詳しい。
- 18) ただし、岩村忍は調査団を統括する立場にあり、調査地におけるインタビュー調査には参加せず、佐口と小野が現地の通訳をとまって調査を行ったという〔中生 1997：54〕。西北研究所の甲田と野村も調査に同行したが、民族研究所の佐口と小野が中心となって準備作業を行ったようである。なお、西北研究所については中生〔2000：224〕に詳しい。
- 19) 岩村忍の調査報告書は、中国ムスリムを研究する中国人によっても緻密な調査方法を高く評価されている。近年、中国人研究者が漢語に翻訳したが、現時点でも中国国内では出版されていない。
- 20) ただし、どちらかといえば、定性的資料よりは定量的資料の収集・分析に重点が置かれており、残念ながら、人類学者の民族誌のように現地住民の生活世界を具体的に知ることはできない。
- 21) 1942年2月25日、蒙古連合自治政府内に回教委員会が設立された。回教委員会の委員長を蔣輝若（包頭）、副委員長を曹英（厚和）、李郁周（張家口）、委員を鄭仁齋（張家口）、王輔（大同）、艾馨（厚和）、呉懋功（包頭）が担当した〔蒙疆新報 1941年9月19日、1942年2月24日〕。
- 22) 北京における日本の回教工作については新保〔2002〕に詳しい。
- 23) 1998年小村が山梨県のイスラーム霊園に土葬されている様子が『アッサラーム』第79号に掲載されている〔『アッサラーム』編集部 1999：57〕。

参考文献

『アッサラーム』編集部

- 1999 『アッサラーム』第79号、イスラミックセンター・ジャパン。
 アブデュルレシト・イブラヒム
- 1991 『ジャポニヤ——イスラム系ロシア人の見た明治日本』小松香織・小松久男訳、第三書館。
 安藤 潤一郎
- 2003 “Japan's ‘Hui-Muslim Campaigns’ (回民工作) in China from the 1910's to 1945: An Introductory Survey.”『日本中東学会年報』18（2）：21-38。
 飯森 嘉助（編）
- 2011 『イスラームと日本人』国書刊行会。
- 岩村 忍
- 1949 『中国回教社会の構造（上）』日本評論社。
 1950 『中国回教社会の構造（下）』日本評論社。
- 内田 知行・柴田 善雅（編）
- 2007 『日本の蒙疆占領——1937-1945』研文出版。
- 内蒙古アパカ会・岡村秀太郎（共編）
- 1990 『特務機関』国書刊行会。

梅棹 忠夫

1991 『回想のモンゴル』中央公論新社。

小野 忍

1948 「中国に於ける回教教団」『東亜論叢』6: 78-89。

河内 美穂

2004 『最後の蒙古浪人 春日行雄』リーブル。

幾志 直方

1940 『西北羊毛貿易と回教徒の役割』東亜研究所。

小林 元

1940 『回回』博文館。

小松 久男

2008 『イブラヒム、日本への旅——ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房。

小村 不二男

1988 『日本イスラーム史』日本イスラーム友好連盟。

1997a 「周口の「東方学堂」——90年昔の日本・中国イスラーム友好のはしり」『アッサラーム』71: 42-46。

1997b 「(続) 周口の「東方学堂」——90年昔の日本・中国イスラーム友好のはしり」『アッサラーム』72: 38-43。

坂本 勉

2008 「アブデュルレシト・イブラヒムの再来日と蒙疆政権下のイスラーム政策」『日中戦争とイスラーム——満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』坂本勉(編)、pp. 1-81、慶應義塾大学出版社。

坂本 勉(編)

2008 『日中戦争とイスラーム——満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶應義塾大学出版社。

佐口 透

1949 「中国ムスリムの宗教的生活秩序」『民族学研究』13 (4): 21-35。

1996 「中国ムスリム研究の回顧と展望——民族研究所とその遺産」『内陸アジア史研究』11: 1-16。

柴田 善雅

2007 「第2章 日本の蒙疆政治支配体制」『日本の蒙疆占領——1937-1945』内田知行・柴田善雅(編)、pp. 41-68、研文出版。

白岩 一彦

2008 「南満洲鉄道株式会社の諜報ネットワークと情報伝達システム——1930年代後半のイスラーム関係満鉄文書をめぐって」『日中戦争とイスラーム——満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』坂本勉(編)、pp. 83-134、慶應義塾大学出版社。

新保 敦子

1999 「蒙疆政権におけるイスラーム教徒工作と教育——善隣回民女塾を中心として」『中国研究月報』53 (5): 1-13。

2000 「日本占領下の華北におけるイスラーム青年工作——中国回教青年団をめぐって」『早稲田教育評論』14: 133-150。

2002 『中華民国時期(1912-1949年)における国家統合と社会教育の研究』早稲田大学大学院教育学研究科博士学位請求論文。

2003 「日本軍占領下における宗教政策——中国華北のイスラーム教徒をめぐって」『学術研究 教育・社会教育・体育学編』52: 1-15。

鈴木 紘司

2011 「『日本ムスリム協会』歴代会長列伝」『イスラームと日本人』飯森嘉助(編)、pp. 155-186、国書刊行会。

善隣協会（編）

1981 『善隣協会史——内蒙古における文化活動』日本モンゴル協会。

田澤 拓也

1998 『ムスリム・ニッポン』小学館。

田島 大輔

2009 『『満洲国』のムスリム』『アジア遊学 129 中国のイスラーム思想と文化』堀池信夫（編）、pp. 146-159、勉誠出版。

2010 『『満洲国』における回民墓地移転問題——『建国』当初の事例を中心に』『立命館文学 本田治教授退職記念論集』619：274-281。

田中 逸平

1925 『イスラーム巡礼 白雲遊記』歴下書院。

2004 『イスラーム巡礼 白雲遊記』論創社。

千種 達夫（編）

1964 『満洲家族制度の慣習』一粒社。

中国回教総聯合会華北総聯合部（編）

1938 『回教』第1巻第4期、中国回教総聯合会。

中国農村慣行調査刊行会（編）

1952 『中国農村慣行調査 第1巻』岩波書店。

都竹 武年雄

2006 『善隣協会の日々——都竹武年雄氏談話記録』小長谷有紀・原山煌・Philip Billingsley（編）、桃山学院大学総合研究所。

中生 勝美

1997 「民族研究所の組織と活動——戦争中の日本民族学」『民族学研究』62（1）：47-65。

2000 「内陸アジア研究と京都学派——西北研究所の組織と活動」『植民地人類学の展望』中生勝美（編）pp. 211-258、風響社。

2011 「第9章 マルクス主義と日本の人類学」『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、學術調査の歴史』山路勝彦（編）、pp. 343-402、関西学院大学出版会。

仁井田 陞

1944 「北京回教徒商工人と其の仲間的結合（ギルド）」『回教圈』8（6）：8-6。

1951 『中国の社会とギルド』岩波書店。

藤枝 晃

1986 「西北研究所の思い出——藤枝晃先生談話記録」原山煌・森田憲司（編注）、『奈良史学』4：56-93。

保坂 修司

2008 「アラビアの日本人——日本のムジャーヒディーン」『中東協力センターニュース』32（5）：43-51。

松長 昭

2009 『在日タタール人——歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』東洋書店。

松本 ますみ

2009 「『佐久間貞次郎の対中国イスラーム工作と上海ムスリム——あるアジア主義者をめぐる考察』『上智アジア学』27：115-134。

南満洲鉄道株式会社調査部

1940 『北支那回教事情』南満洲鉄道北支経済調査所。

※『アジア・太平洋地域 民族誌選集 36』（山下晋司・中生勝美・伊藤亜人・中村淳（編）、クレス出版、2002年）に所収。

民族研究所・西北研究所

1944 『第1期蒙疆回民調査項目』 出版社不明。

蒙古善隣協会調査部

1942 『蒙疆回教徒実態調査資料』 善隣協会。

森 久男

2009 『日本陸軍と内蒙工作——関東軍はなぜ独走したのか』 講談社。

山崎 典子

2011 「日中戦争期の中国ムスリム社会における「親日派」ムスリムに関する一考察——中国回教総連合会の唐易塵を中心に」『中国研究月報』65(9):1-19。

山路 勝彦

2011 『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』 関西学院大学出版会。

山本 登

1941 『満州国の回教調査資料』 東亜研究所。

包頭市民族宗教志編修弁公室・政協包頭市東河区文史委員会(編)

1987 『包頭回族史料』 出版社不明。

代 林

2001 「『德厚堂』曹氏家史」『呼和浩特回族史料 第4輯』政治協商會議呼和浩特市回民區委員會・『呼和浩特回族史料』編集委員会(編)、pp.213-251、内蒙古人民出版社。

傳 世魁

2001 「日偽時期的厚和回民會館」『呼和浩特回族史料 第4輯』布衣(整理)、政治協商會議呼和浩特市回民區委員會・『呼和浩特回族史料』編集委員会(編)、pp.205-212、内蒙古人民出版社。

李 士榮

1988 「日寇在包頭地區的侵略罪行」『包頭文史資料選編 第10輯』『中国人民政治協商會議包頭市委員會・文史資料委員會(編)、pp.1-87、包頭市政協『文史資料』編集部。

李 偉・雍 際春・王 三義

2001 『抗日戰爭中的回族』 甘肅人民出版社。

『蒙疆新報』

1941 「蒙疆回民 4次訪日視察團 在包頭開報告大會」7月16日。

1941 「回教委員會成立期近 委員長以下首腦亦內定 將展開實際躍進的活動」9月19日。

1941 「厚和清真寺新築 望月樓竣工 落成式典盛大隆重」11月24日。

1942 「回教委會開庁式 明日下午在政府會議室舉行」2月24日。

忒 莫勒

2007 「偽蒙疆西北回教聯合會」『呼和浩特回族史料 第7輯』政治協商會議呼和浩特市回民區委員會・『呼和浩特回族史料』編集委員会(編)、pp.70-76、内蒙古人民出版社。

吳 懋功・王 質武

1987 「日軍占領時期的包頭回族人民」『包頭回族史料』鄧英(整理)、包頭市民族宗教志編修弁公室・政協包頭市東河区文史委員会(編)、pp.44-55、出版社不明。

張 巨齡

2008 『川村狂堂和“滿洲伊斯蘭協會”』 出版社不明。

2001 『綠苑鈞沈——張巨齡回族史論選』 民族出版社。

中国人民政治協商會議阿拉善盟委員會・文史資料研究委員會(編)

1988 『阿拉善盟文史 第4輯』 出版社不明。

中国人民政治協商會議包頭市委員會・文史資料委員會(編)

1988 『包頭文史資料選編 第10輯』包頭市政協『文史資料』編集部。

政治協商會議呼和浩特市回民區委員會・『呼和浩特回族史』編集委員会(編)

- 1994 『呼和浩特回族史』 内蒙古人民出版社。
 政治協商会議呼和浩特市回民区委員会・『呼和浩特回族史料』 編集委員会（編）
 2001 『呼和浩特回族史料 第4輯』 内蒙古人民出版社。
 政治協商会議呼和浩特市回民区委員会・『呼和浩特回族史料』 編集委員会（編）
 2007 『呼和浩特回族史料 第7輯』 内蒙古人民出版社。

データベース（アジア歴史資料センター）

関東軍参謀部

- 1934年1月24日 「対察施策の件」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C01002960500、昭和9年「陸満密綴 第3号」自昭和9年2月5日至昭和9年3月13日（防衛省防衛研究所）。

関東軍参謀部

- 1935年7月25日 「対内蒙施策要領」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C12120083100、対内蒙施策要領 昭和10年7月25日（防衛省防衛研究所）。

関東軍参謀部

- 1936年1月 「対蒙（西北）施策要領」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C12120032100、満洲事变作戦指導関係綴 別冊其の1 昭和6年9月19日～8年8月2日（防衛省防衛研究所）。

関東軍参謀部

- 1936年4月28日 「内蒙古工作ノ現状ニ就テ」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02030154500、帝国ノ対支外交政策関係一件 第6巻（B-A-1-1-095）（外務省外交史料館）。

外務省

- 1938年11月15日 「各国ニ於ケル宗教及布教関係雑件 第三巻 14. 満州国（1）一般及雑」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012543400、各国ニ於ケル宗教及布教関係雑件 第3巻（I-2-1-0-010）（外務省外交史料館）。

在上海領事館日高信一郎

- 1938年3月25日 「各国ニ於ケル反共産主義運動関係雑件 第三巻 31. 青海馬歩芳利用方ニ関スル件」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012985200、各国ニ於ケル反共産主義運動関係雑件 第3巻（I-4-5-1-020）（外務省外交史料館）。

在厚和領事館望月静

- 1944年9月・10月 「厚和市回民駝業者一覧表」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B08061964800、外国旅商関係雑件（B-E-2-11-0-4）（外務省外交史料館）。※ 調査機関は西北事情研究所。

陸軍省

- 1938年11月9日 「西北回教連合会会則の件」 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C04120632300、昭和13年「陸支密大日記 62号」（防衛省防衛研究所）。